

記 事

消 息

第34回矢数医史学賞を受賞して

青木 歳幸

『洋学史研究事典』編集委員長

このたびは伝統ある矢数医史学賞を『洋学史研究事典』にいただき、編集委員一同大変喜んでおります。ありがとうございました。

洋学史研究事典の編集にいたった経緯ですが、洋学史学会は、それまでの蘭学資料研究会が解散後、そのメンバーらが中心になって英学史や対外交流史、日本史などの研究者があつまって、1991年に発足しました。

2017年の洋学史学会25周年記念総会で、『洋学史研究事典』の編纂を提起しました。その主な理由の一つに、それまでに洋学についての事典は『洋学史事典』(日蘭学会編、雄松堂1984)があり、基本書でした。しかし、40年以上前の研究だったので、その後の研究、とくに地域史研究の進展により明らかになったことが十分反映されていませんでした。また、グローバルな社会の進展のなかで、蘭学研究中心だけでよいのかという、洋学研究そのものの学問意義も問われていました。そうした研究状況をふまえた、新しい事典の作成が必要となったのです。また、執筆者の世代交代もすすんでおり、蘭学資料研究会の活動を知る研究者が高齢化し、今を逃したら、その知識を後世の研究者に伝えたいという現状もまた、執筆の理由の一つでした。

まず、洋学史研究とはなにかについて、討議を重ねました。従来は、蘭学研究といえば、たとえば、「蘭学トハ、即チ和蘭ノ学問ト云コトニテ、阿蘭陀ノ学問ヲスルコトナリ」(大槻玄沢『蘭学階梯』)とか、「江戸時代を通じて直接・間接の差はあるがオランダ語を通じて輸入され受容された西洋の学術・文化・技術その他西洋についての知識



一切を含めたもの、またそれを学び研究すること自体を「蘭学」と総称する」(沼田次郎『洋学』、吉川弘文館、1989)」とされてきました。

しかし、グローバル化した現代における洋学史研究は、西洋だけにとどまらない知の交流をめざすとして、「16世紀にヨーロッパ人がはじめて来航してから、日本列島に住む人々は、在来の技術や大陸から得ていた知識を土台に、西洋の人やモノ、書物から積極的に多くを取り入れるだけでなく、発展・昇華させ、地域社会でさまざまな達成をもたらしていた。明治に入って西洋の科学が日本の学術の正統に位置づけられるようになるまでの、その営みの総体を洋学史とよぶ」(「刊行のことば」と新たに定義づけ、研究編と地域篇の二つの視角から、洋学史研究の現在を描くことにしました。

『洋学史研究事典』と医史学研究の関わりは、6月例会の報告で詳細に述べますので、本稿では、その一部を紹介したいと思います。研究編では6章にわけ、第1章洋学の社会的基盤では、オラン

ダ東インド会社，オランダ通詞，医療宣教，幕末のコレラなど，II. 支えた人々では，カスパル・シャムベルゲル，沢野忠庵，シーボルト，ポンペ，ボードインなど．III. 影響を与えたモノでは，医療道具・医科器械，人体模型など，IV. 普及した書物では，ハルマ和解，パレとハイステル外科書，解体新書など，V. 研究教育の場では，蘭学塾，薬品会，薬園，長崎海軍伝習所など，VI. 近世学芸から近代学術へでは，外科，解剖，内科，小児科，種痘などがまとめられています．

地域篇では，各県ごとに洋学研究の現状をまとめ，医史学についても，できるだけ地域の医学のありかたや種痘などについて，叙述をしてあります．

こうして5年間で，221人の執筆者により，385項目におよぶ『洋学史研究事典』ができあがりました．巻末には，各地の洋学資料の主な保存機関を紹介してありますので，今後の研究の手掛かりにならうかと思われます．



このように『洋学史研究事典』は，医史学研究の皆さんにも，研究のヒントが多く得られる本なので，ぜひ座右においていただけたらと思います．

第34回矢数医史賞受賞をうけて

藤本 大士

日本学術振興会特別研究員PD／京都大学大学院

このたび、「第34回矢数医史学賞」に拙著『医学とキリスト教—日本におけるアメリカ・プロテスタントの医療宣教』（法政大学出版局，2021年）を選出いただき，誠にありがとうございます．私は修士課程の頃から日本医史学会に参加し，拙著のもとになった博士論文の一部を年会や例会，『日本医史学雑誌』上などで発表をおこなっておりましたので，今回，日本医史学会から賞をいただけたことは大変光栄です．

拙著は，アメリカ人プロテスタント宣教師による日本での医療宣教を，幕末から戦後にいたるまで注目して分析したものです．これまでの医学史の先行研究では，近代日本の医学界がドイツから強い影響を受けていたということが指摘されてき

ました．一方，ドイツ以外の西洋の国々は日本の医学界にどのような影響を与えたのだろうか，というのが拙著を書くきっかけとなった問いでした．そして，調べていくうちに，1900年頃までに来日した西洋人医師の中では，数の上ではドイツ人医師よりアメリカ人医師が多かったこと，そして，彼らアメリカ人医師のほとんどを占めていたのが医療宣教師と呼ばれる人たちであったことがわかりました．そのため，博士論文では，アメリカ人医療宣教師の活動を取り上げようと考えました．

アメリカ人医療宣教師の調査を進める上で一番助けとなったのが，日本医史学会の大先輩である長門谷洋治先生の研究でした．とくに，1900年頃